自分だけの価値

Sophie Kinsella 著 *Twenties Girl* における女性達への本質的贈り物

梅岡千恵

20 世紀英国女流作家 Virginia Woolf は 1929 年、著書「自分だけの部屋（*A Room of One's Own*）」の中で、お金と自分自身の部屋という「外側にある条件」によって、自己の人生を創造する自由を得た事を書いた。未来を築いていく女性達にも、「外側にある条件」を整え、女性の存在価値を獲得するよう鼓舞した。

それから 80 年、「外側」にある社会的地位、物質的豊かさ、結婚を獲得するために奮闘してきた女性達だが、いまだ自分の真の価値を見出せずにいる場合がある。21 世紀英国女流作家 Sophie Kinsella が 2009 年に発表した *Twenties Girl* では、ウルフの教えどおり、外側を整えることに奮闘して生きる主人公 Lara が、元恋人に執着し、自分の存在価値を元恋人に委ねている。そんな彼女がある出会いを通じ、自分の「真の価値」に気づいていく過程が書かれている。Lara が真に自立していく「覚醒の物語」であると同時に、21 世紀に生きる、全ての女性達の「覚醒の物語」でもある。この発表では、*Twenties Girl* が現代女性達に与える「本質的贈り物」について考えたい。

「自分だけの部屋」：自己価値を勝ち取ること

ヴァ―ジニア・ウルフは『自分だけの部屋』の中で、女性が「小説なり詩なりを書こうとするなら、年 5 百ポンドの収入とドアに鍵のかかる部屋を持つ必要がある」(Woolf 159)という有名な提言をしている。亡くなった伯母の遺産という「外にある要素」をウルフ自身相続したことで、彼女は自由を手に入れた。次の時代を築いていく女性達に、自立への「目覚め」を促している。そんなウルフだが、精神的に病み、1941 年川に身を投じ、生涯を閉じた。強い言葉で象徴される自信とは裏腹に、ウルフが精神的弱さを併せ持っていることに注目したい。

ウルフにとり、女性の価値、自信は他者との「比較」の中で、「優劣」の中で、つまりは「戦い」の中で、外側を整えることにより、勝ち取るものである。

> 私達は、自信なくしては、揺り籠の中の赤ん坊にも等しいものでしょう。ところで、今なお非常に貴重な、この測り知れぬほど重要なものを、どうしたら最も手早く生み出せるでしょうか？他人は自分より劣る、と考えることによってなのです。自分には生来他人より優れたところがある――財産でも地位でも真っ直ぐな鼻でも、或いはロム二ィの描いたお祖父さんの肖像画でもよいのですが――人間の想像力がいじましくもあれこれ考えだすことには限りがありませんので――と感じることによってなのです。(52)

ウルフ自身、戦い続けたが、その様なあり方は本質的ではなく、心休まることはなかった。戦い続ける人が最も弱くなるのは、競争相手を失ったときである。権威的父親レズリー・スティーブンソン、そして兄トウビィという乗り越えるべき存在、つまり「競争相手」を失ったとき、ウルフは精神を病んでいく。

他者との関係性の中で優劣を競い、自己の存在意義を感じる、という段階は、精神性が未熟である 。自分の意識が「外側」にばかりに向いていて、自身の「内側」に一切向いていない。競争するべき他者がいなくなると、途端に自分の存在意義、価値を見失い、精神性が乱れ、病む。元々、自分を信じられていない状態にある。

ウルフが当時考えていた「女性の価値」は、「外側にある条件」によって、左右されるものである。「お金」がなくては、「自分だけの部屋」がなくては、そして「競争相手」がいなくては、感じられないものだ。外側で揺らぐ「自己価値」、「自信」では、本当の意味での安心感は得られないし、自信を感じることはできない。

Twenties Girl：既にある自己価値に気づくこと

ウルフが女性達を鼓舞してからほぼ70年後、英国女流作家Sophie Kinsellaは作家デビューする。彼女が2009年に発表した*Twenties Girl*は、社会的地位、物質的豊かさ、結婚といった「外付けの条件」を整えるために奮闘している現代の女性達に、「真の目覚め」を促す小説である。

主人公Laraはウルフの教えを忠実に守り、自分の存在意義を見出そうと、仕事に悪戦苦闘し、結婚を夢み、恋愛にも奮闘している。だが、Laraは元恋人Joshに執着し、自立からほど遠い。Joshのいない自分は価値がなく、また彼のいない人生は生きる意味がないとでも考えているようだ。素晴らしい人と新たに巡り合え、その人と最良のパートナーシップを築いていける、という自分自身の人生を信用していない。自分を大切にしてくれない人を必死に自分につなぎとめることで、自己価値を高めようとしている。

伯母の死と遺産がウルフにとり転機となったように、大叔母の死がLaraにとり転機となる。105歳で亡くなった彼女の葬式で大叔母Sadieと対面する。自分の葬式以降、twenties(1920年代)に若い女の子であったSadieとして、Laraの前だけに姿を現す。死してなお、やり残したことがあり、Laraの回りを亡霊として彷徨っている。

1920年代は、まさに、ヴァージニア・ウルフが精力的に執筆していた時代である。そして、この大叔母Sadieに「ヴァージニア」という姉妹がいたことに注目する。Laraは「ヴァージニア」の孫であり、ヴァージニア・ウルフ的価値観の影響を大きく受けているからこそ、外側を整え、自己の価値を高めようと悪戦苦闘している。

Sadieは“Virginia laced herself in and put her hair up and arranged the flowers in church every week. She was the dullest girl in Archbury. And then she married the dullest man in Archbury”(160)と、「ヴァージニア」の価値観を一蹴する。本当の「幸せ」、「自立」、そして「自由」とは何かを、より深くとらえているSadieは、「ヴァージニア」の価値観を受け継ぎ、外側を整えることに悪戦苦闘しているgreat-nieceであるLaraに、ウルフの価値観とは全く違う「新たな価値観」を伝えるべき、Laraの前に姿を現した。この「新たな価値観」を伝えることこそが、亡霊Sadieの地上でやり残したことである。

生涯独身であったSadieは何も成し遂げられなかった孤独な女性として、無価値感をかかえ、生きてきた。Laraはある日、Sadieの故郷Archburyを訪ね、偶然辿り着いた牧師館にて、*Girl with a Necklace*という一枚の絵を見、驚きを隠せない。”There she is. Gazing out of the ornate gilt frame, looking as though she owns the world, is Sadie(405)”と見つけたのは、当時のSadieの恋人が、若いころ描いたSadieの肖像画である。二人の想いは結ばれなかったが、彼のSadieへの一途な愛情が見える。Sadieは愛されていなかったと、無価値感を抱え生きてきたが、実際は愛されていた。価値が「無い」という自己認識自体がそもそも勘違いであった。

人は人生で成し遂げた「外側」の何かで自分の価値を決めがちである。「外側」の何かを得ようと必死に戦い、そして得たものを無くすまいと執着し、自分らしさをなくしていく。しかし、たとえ成し遂げることは無くても、この世に「存在している」というだけで、誰かを幸せにすることができ、インスピレーションを与えることができる。人の本質的価値は「外側の何か」で決まるものではない。「獲得」するものではなく、既に「ある」ことに気づくことが大切なのだ。外側の何にも左右されない「自分の真の価値」に気づき、自分を全面的に受け入れ、そんな自分を大切に生きていくことこそ大切なのだ。

SadieはLaraに付き添われ、この絵画と対面する。Sadieは死してやっと、自分自身の存在価値を受け入れることができた。このSadieの体験は、確実にLaraを成長させる。Lara自身も自分自身と向き合い、自己価値に目覚める。Joshは自分を愛していないし、自分も彼を愛していない、ということに気づく。自分自身のこと、元恋人のことを客観視できたことにより、執着を手放すことができるようになる。Laraの成長、自信、そして自立を見届け、大叔母Sadieは平安の中、天に召されていく。ウルフが残した「外付けの遺産」ではなく、「既にある自己の存在価値への目覚め」という本質的贈り物を、Laraと21世紀を生きる全ての女性達に遺して。

Sadieは私達を「真の幸せ」へと導いてくれている。女性達が「真の自信」を取り戻すよう、自己価値に目覚めるよう、伝えてくれている。Sophie Kinsellaの*Twenties Girl*は女性達に「本質的気づき」、つまり、「自分だけの価値」に気づくことの大切さを教えてくれている。21世紀Kinsella版「自分だけの部屋」である。

引用文献

Kinsella, Sophie. *Twenties Girl*. New York: Dell, 2010.

Woolf, Virginia. *A Room of One's Own*. London: Penguin Books, 1945. 『自分だけの部屋』川本静子訳、みすず書房、1995年。